資料渉猟余話

その107

浅井洌の飯田下伊那紀行

明治二五年の修学旅行記より①

鎌倉貞男

一、長野師範の修学旅行と浅井洌

昭和四三年に「信濃の国」が長野県歌に制定されてから、今年で五十年目を迎えるという。これを機に、作詞者浅井洌（一八四九～一九三九）と飯田下伊那との関わりを調べてみた。

参考にしたのは、以前読んで印象深かった彼の遺稿「長野県尋常師範学校生徒修学旅行概況」（『浅井洌』所収、平成二年・松本市教育会刊）である。この手記は、題の通り、浅井洌が長野師範（現信州大学教育学部）の生徒の修学旅行に同行した折の旅行記である。

それによれば、浅井洌が飯田下伊那を訪れたのは、明治二五年（一八九二）夏のことである。当時、彼は長野県尋常師範学校の助教諭であったことから、同校生徒を引率して来飯したのである。右の旅行記はかなり長文である上に、文語文で書かれていて少しく難解であるので、関係部分を抜粋して平易な現代文で紹介しようと思う。

その頃はと言うと、大日本帝国憲法や教育勅語が発布されたり、国会が開設されたりした時代である。また、国鉄直江津線（後の信越線）が徐々に開通は、西尾実や日夏耿之介が誕生し、菱田春草が東京美術学校で学んでいた頃である。

そんな頃、浅井は長野師範学校の男子生徒二・三・四年生八七名を引率して、静岡・愛知・岐阜方通って三河に出て、右の三県を巡り、木曽路を抜けて帰る経路である。当時の交通事情からして、一部汽車や舟を用いるにしても、すべて徒歩である。そのため、この修学旅行は、前数年の旅行に比して極めて長期、長途の旅であった。

旅行中の主眼は、天龍川・名古屋城・尾濃震災地の見学と御嶽登山であった。次いで、三遠尾濃の地は、織田・徳川・今川諸氏に関する古跡も多いことから、三方ケ原・浜松城・小牧山・桶狭間等を探訪する狙いもあった。

旅行人員は、教頭正木直太郎（翌年末、同校校長・信濃教育会会長に就任）以下、総計百四人であった。この中には、引率者数名のほかに、随行員四名、小使二人、定雇人足二人も含まれていた。但し、当時の長野師範の生徒数は一三三人だが、一年生三五人と当該学年で病気の者は参加していない。

明治20年代の浅井洌（松本市教育会編『浅井洌』より）

旅行に参加した生徒名を見ると、守屋喜七（初等教育家・県視学）・樋口長市（高等師範教授・東京盲唖学校長）・芦部猪之吉（初等教育家・海外発展運動家）等、後の著名な教育者もおり、目を引く。本郡関係では、後年長く川路小学校長を務めた興津一二三がいる。

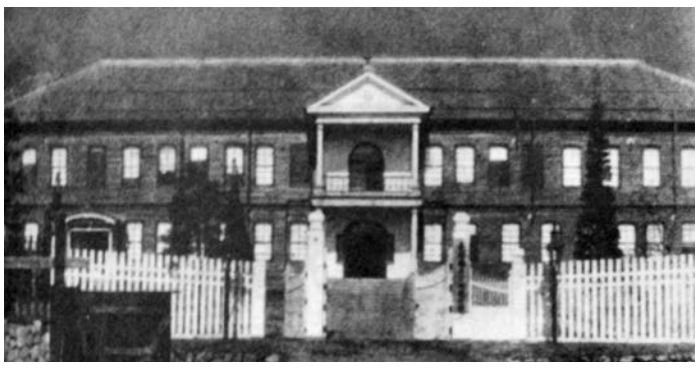
参加者は全て規定を遵守し、飲酒はもちろん、みだりに蝙蝠傘を用いたり、車馬に乗ったりすることは堅く禁じられていた。今から考えると、そうした状況で一日十里以上もよく歩いたものだと思う。

最後に、七月二九日に長野を発ち、八月十六日に松本で解散するまでの十八泊十九日に及んだ大旅行の宿泊地を記す。

和田・上諏訪・高遠・飯島・飯田・開善寺・二俣・豊橋・岡崎・名古屋・岐阜・御嵩・中津川・須原・王滝・黒沢・奈良井・松本

本稿では、この内、飯田下伊那に関する部分だけを抄出し、なるべく本文を尊重しながら、口語文でわかりやすく紹介することにする。

（故人敬称略）



当時の長野県師範学校本校舎（『長野県歴史大年表』より）